



2007年(平成19年)
3月号(No. 742)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会への提言	
豊饒だった登山文化と高齢化	1
「中央分水嶺踏査」事業完了!	
報告書出版記念フォーラム開催	4
竹内洋岳、「14サミッター」として始動!	
講演会と杜行会が開催される	6
東西南北	8
小島鳥水 版画コレクション展	
森づくり、日本山岳会の将来、そして熱帯雨林	
支部だより	10
山形/岐阜	
活動報告	11
資料映像委員会/医療委員会/広報委員会/山研運営委員会/緑爽会	
図書紹介	14
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

日本山岳会への提言

豊饒だった登山文化と高齢化

横山厚夫

かつて日本が登山ブームに湧いた時代があった。その指導的役割を担ったのが日本山岳会である。当時の一端を知る横山厚夫氏に、かつての日本山岳会の雰囲気を取り返し、最近の高齢化の問題を含めて今後の会のありかたを展望してもらった。

先夜、会報編集委員長の神長さんから電話があった。日本山岳会(以下、会)の現状と将来をどう考えるかと尋ねられて、二、三、思いつきを答えると、それを『山』に書いてくださいという。もし、それが「日本山岳会への提言」なると表題がつくとするならば大変だ。私の任にあらずと再三固辞し

たにもかかわらず、電話が終わったときにはなんとなく承諾する羽目になっていた。近郊の山がほとんどで大した山に登っているわけでもないし、確かに会歴は長いにしろ会の運営に関わるような仕事はなにひとつしてこなかった。会人は使いが荒いと聞き、捕まっては大変とあえて

ルームに顔を出さないようにしていたふしもある。わずかの期間、図書委員会の片隅にいただけにすぎない。いわば典型的なノンポリにすぎない私が、ここで、なにをどう書いたらよいのだろうか。

散々迷ったあげく、大勢の会員のなかには私のような一人もいて、その人間が今までもずっと会員であったことをどう考え、さらには会の現状と将来をどう考えているかを正直に書いてみることにした。

以下は私の極めて個人的な見解にすぎないことをお断わりしておき、また、銀色の縁取りをしたパジャマが送られてきて自分でも驚くような歳になれば、少々の昔話が混じることもお許しいただきたい。

私の入会は1956年、山登り

を始めてから6年目の年だった。

動機の一つはヒマラヤ登山に関する。会の登山隊がマナスルの初登頂に成功したのはその年の5月のことで、当時の『山岳』や会報にはヒマラヤの記事が充満していた。少し格好よくいえば「隅田川の水はテムズ川に続いている」式に、実際に登るのは奥多摩や奥秩父の中級山岳どまりにしろ、やはりヒマラヤの山々は大きな憧れだった。その探検や登山記録に読みふけっていると、気分高揚、マロリー、アーヴィンの最後の登高のくだり、あるいは候文に訳されているスコットの遺書などにはいいようなない感動をおぼえたものである。

それに、もう一つの動機に、自分の名の下に「日本山岳会会員」



会の先輩と交流を深め、伝統を育む「有志閑談会」。1953年6月14日に開かれた第1回。出席者は、冠松次郎、田部重治、松方三郎、武田久吉、高野鷹蔵、日高信六郎、村井米子ら（順不同）

と付けてみたい娑婆っ気が全くなかったといえは嘘になる。

それから約半世紀がたった今日、振り返ってみれば、私は会から大いに恩恵を受けてきたことに気づく。各種の集会や講演会も気が向いたときに出る程度のものであったが、新知識を得たし啓発もされた。個人ではなかなか行きにくいペテガリや能郷白山などに登ることができたのも、支部主催の山行に加えてもらえばこそだった。

そしてなによりもよかったですと思うのは「人」と知り合えたことである。そうしたなかには、すでに故人となった何人かの方々もおいでだが、今、そのお顔を思い浮かべれば、直接話したことのある無しにかかわらず「いろいろ、ありがとうございました」と厚くお礼を述べたくなってくる。

私が入会した1956年は、まだ会ができてから50年ほどにしかなくていいない。7人の創立発起人のうち4人の方々が存命で、なお、会の中核として矍鑠と活躍される方もあり、晩餐会などで遠く仰ぎ見ることもあった。

さらに早くから会にあって奥秩父のバイオニアとして活躍された田部重治さん、中村清太郎さんの顔はとくにまぶしかった。例えば、その昔の明45（1912）年春、大菩薩北面大黒茂谷での遭難は本で読めば登山史上の出来事にすぎないが、その当事者であるお二人に集会の席上などで実際に目

にかかれば、うーんと唸るしかない。そして、尋ねてみたいことも少なくなかった。活字で読むのと直接話を聞くのでは大違いである。

しかし、私はそれをしなかった。なんとなく近づきたい気がしたためである。こちらから謙虚に声をかけ教えを乞えば、惜しみなく答えてくださったに違いない。のちに東京から見える山の本を書いたとき、その先駆者の一人の中村さんにお送りすると「遊びにいらつしやい」との電話があったにもかかわらず、やはり逡巡のあげくに失礼してしまった。

こうしたことは、ほんの一例だが、いまは大いに悔いが残る。あのとき、大先輩であろうとも遠慮なく聞いておけばよかったと残念でならない。

今の時代は物怖じしない人々が増え、かつての私のような妙な遠慮をする風潮も薄れていよう。なにごととも尋ねれば、親切に、そして存分に答えてくださる方々が会にはたくさんいらつしやる。

後年、望月達夫さんを通じて藤島敏男さんと知り合うようになったが、近頃、木暮理太郎さんの事

跡を追うようになってとくに残念に思うのは、なぜ、藤島さんが存命のうちに木暮さんのことを聞いておかなかったかである。このお二人はいっしょに利根源流の山を歩いていて、その折、どのようなものを食べ、どのようにして山で寝ていたかなども、本だけではなかなか知りくい事柄である。木暮理太郎像も、藤島さんの口からじかに聞いてみたかった。当時、私には、まだ尋ねるだけの知識がなく、いまはもつと若いうちから勉強しておけばよかったと後悔するばかりである。

なお、時には会特有のエリート臭に辟易することもあったが、それはドブ板踏んで出てくるような家の生まれである私だけの僻目（ひがめ）かも知れないと、これは蛇足。

そして昔事ばかりでなく、今日、時折の山で行をともし、街で語るのも、そのほとんどが会で知り合ったよき友人たちであることを、とくに強調しておきたい。

古い会報の頁をめくっていると、会がいかに早くから蔵書の充実に力を入れてきたがよく判る。「日本山岳会の名に相応しい内容の整

った図書室」を育てあげるべく図書基金を創設し、「本会の図書室を豊くとも本邦に於いて最も完備せる山岳図書館たらしめるため」に多くの会員が努力してきた。そうした蔵書のすべては1945年5月の戦災によって一時烏有に帰したが、その後の努力によって、現在、ご覧の通りの図書室にいたっている。

私が会に入ってからよかったと思うのは自由に図書室が利用できたことであり、会の存在理由の一つに、質量ともに充実した図書室を持つことにあるのではないかとさえ考えるようになった。先日、志賀重昂の文章を少し調べたくなって図書室にいくと、その全集まであったのには感激した。

しかし、なお不満は少なくない。和書洋書を問わず、こんな本もないのかと思う場合もしばしばである。私が会の将来に強く望むことは、よりいっそうの蔵書の充実である。誰もが読みたい調べたいと願う山と探検関連の本がみなそろっていてこそ、会の図書室ではないだろうか。蔵書は本そのものばかりではなく、入れ物や管理に多大の費用がかかるが、一過性の催

し事よりも、これからの会員のためにも長く役立つのが完備した図書室だと確信する。

毎月の『山』を開き新入会員の年齢に目をとめるたびに、会も日本国の縮図だから、高年齢化は仕方のないことかと思う。『山岳』第百一年の後記に南川金一さんが「本誌の編集委員は81歳を筆頭に、平均年齢68歳」と書き「頼りになる若い働き手がいらないような組織は、動脈硬化をきたした人間の身体と同じであり、そんな組織に明日はないだろう」と続けているのには私も同感だ。はたして5年先、



1964年8月19日、東京・渋谷の外苑コーポにあった山岳会ルーム。車座には、松方三郎、日高信六郎、神谷恭らの顔が見える

10年先の会はどうなっているのだろうか。本会会員にも『定年後は山歩きを愉しみなさい』『若さの秘訣は山歩き』などの著書があるくらいなのだから、今後も自分のあいだ会員の平均年齢を格段に上げる若者よりも、高年齢者のほうが多く入会してくるだろう。しかし、それをいま考えてもどうなるものでもないだろう。あるがままの現実を受け入れ、そのなかで最大の努力をしていくより他はないと思う。ただし、年寄りにありがちな頑冥固陋(がんもくろう)にならないこと。

そうしたなかで、『山』の頁を開いてみれば、百年史配布の囲み記事の中に「不要な方がおいででしたら予め事務局にハガキで申し出てください」などという不思議な一文があつて仰天するような場合があるものの、総じて今の会はよくやっていると私は読んでいます。種々の集会や登山の報告もよし、さらには人を得た懇話会や懇談会のお知らせもよし、図書交換会の復活もよし、である。

宮下啓三さんは「山とスポーツ」(『山岳』第百年)のなかに「登山家になることを許されなかったラスキンのようなタイプの人にも居

心地のよい「山岳会」、それを私は二十一世紀の山岳会の姿としてイメージします」と書いてあるが、私も会の将来はそうあつて欲しいものだと思う。さらには今の世の中にややもすると欠けていると思われる、ある一線を越えてはいけないという限度を心得た運営をのぞんでいる。

前記の藤島さんは望月さんにいわせると「クラブから受けるものは常に無形の良さであることを強調し、その反面クラブから収奪することは、有形無形を問わず、極めてこれを忌み嫌った」人だったそうで、私も耳が痛い、会員も会自体もこの言葉に値するものであつて欲しいものである。

近々、執筆や編集に携わった方々の長年にわたる努力の末に会の『百年史』が上梓されるといふ。興味がないから読まない、いろいろななどというのではなく、ここで、もう一度、この会がどういう百年の道程をたどつて今にあるかを確かめるために、その熟読をお勧めしたい。私も、そうするつもりである。

「中央分水嶺踏査」事業完了！ 報告書出版記念フォーラム開催

日本山岳会創立100周年記念事業の国内登山として位置づけられた中央分水嶺踏査は、昨年11月すべて完了した。そして2月17日、報告書出版を機に、国土交通省国土地理院の後援を得て、弘済会館で記念フォーラムが開催された。

当日は、各支部の支部長・事務担当者・分水嶺担当者を含めて150名を超える参加者が集い、熱気に包まれた。会場には日本地図上に踏査の足跡がトレースされ、数々の思い出の写真も展示された。記念フォーラムでは、次の方々から話があった。

開会挨拶 平山善吉会長

分水嶺踏査は、北海道の宗谷岬より九州の佐多岬まで約5000キロのルートに足跡を印す壮大なものである。その大部分は道無き藪漕ぎであるので、積雪期・残雪期が多かった。このイベントを無事に、成功裡に終えることが出来たことは喜びに耐えない。

多くの苦労の中から日本の山を見直したと、山歩きの原点を再認識できたこと、全国の会員の足跡が1本の線で結ばれ、日本山岳会が強い連帯感で結ばれたことは100周年の記念碑にふさわしい。

踏査概要の報告

近藤善則 分水嶺委員

踏査は04年1月(秋田支部は前倒しで03年9月から一部実施)から06年11月までの3年間で実施された。山行報告書は1032枚に達した。それを基に集計すると、参加人数1460名、延べ人数5947名、延べ歩行時間3740時間、チェックポイント1832カ所、三角点950カ所に及んでいる。

当初は完全踏査を困難視する声が多数あったため、チェックポイントだけでも踏査しようというところでスタートしたが、各支部・同好会等の取り組みが進むとともに、何とか線で結ぼうとの気運が高ま



冒頭、挨拶する平山会長

り、立ち入り禁止区域を除いて、太い1本の線で結ぶことができた。まさに、全国の会員がJACの伝統であるパイオニア精神を発揮した結果である。

地形学から見た分水界 小崎尚 明治大学名誉教授

地表に降った雨水は地表を流れるか、一度地中に浸透してもいずれ川に集まり海へと流下する。ある川に水が集まってくる範囲をその川の流域といい、流域の境界が分水界である。大きな川は山地に源流域がありその峰や山脈を分水嶺という。

地球規模の分水界(カナディア

ン・ロッキーのコロナビア・アイスフィールド)もあるが、日本では水系が発達して分水界が確立している。そして、石灰岩地帯では地下水が山を突き抜けて流れるため分水界が複雑になるが、総じて分水嶺は分水界と同じである。

日本列島は1本の単純な弧状列島でなく6つのカマボコ島弧が繋がっている。日本の大分水界は大勢において列島のほぼ中央の脊梁山地に沿っているが、複数の島弧が交わる北海道南部、中部地方、九州では島の長軸方向と山脈が斜交して大分水界は各山地の山稜を通らず横切るか避けて走っている。

測量、地図に関する最近の話題 津沢正晴 国土地理院測地部長

JACの分水嶺踏査完了の偉業に対して祝意を表したい。今回の分水嶺踏査で得たGPSでのデータは各地方の測定部に配布済みであり今後の活用を待っている。

最近の三角点の測量はGPSで行なっている。従来の三角測量と違って孤島の測量はいたって簡単になった(現地写真で説明)。

GPSはアメリカ空軍が運用し



熱気につつまれたフォーラム会場

踏査記録とGPSの効用 宮崎絃 一分水嶺委員

山行報告書を読んで、今回の分

ている全地球測位システムで地球の軌道上を回る複数の衛星からの電波信号を受信し、船舶、航空機が自分の位置を測定するものである。アメリカからの影響を逃れるためロシア、ヨーロッパが独自のシステムの確立に懸命である。今後どのように展開されるか興味ある問題である。

山岳地図の作成にGPSの連続測地による方法や立体視地図、さらに建物・樹木を透視した地図も出現している。

また、登山の記録として軌跡のデータを取ることによって、三次元の位置に時間を加えた四次元の記録を得る事が出来る。地形図が揃っていない海外の登山では利用価値が大きいと思われる。

「追記」06年10月1日マナスル登頂に成功した日本山岳有志隊は、ベースキャンプ以降四次元の記録を残している。

出席者と語り合おう 「踏査を振り返って」

第2部では、藤本慶光分水嶺委員の軽妙な司会のもとで、多くの参加者から発言があり、フォーラ



会場内に展示された踏査資料

ムは盛り上がった。

最初に、全国6ブロック（北海道、東北、関東・甲信越、中部、関西・中国、九州）と首都圏Ⅰ・Ⅱの代表より感想とトピックスを披露してもらった。

ハードな山行であったこと、山歩きの原因に戻ったこと、未知な山が多いのを再認識したこと、達成した時の大きな喜びと仲間との連帯感が生まれたことなどが次々に報告され、いかに共有するものが多いかたかを認識させられた。

トピックスとしては、分水嶺上の最高点と最低点、自衛隊基地内の踏査、分水嶺の新道作り、カルスト台地でのルート選択の難しさ、

今回対象外であった四国・北海道東部の踏査を継続している話等々、分水嶺踏査を通じて各支部が活性化され、支部間の交流が深まったことなどが披露された。

最後に踏査報告書編集担当福山美知子委員より編集報告について話があった後、100周年事業委員会委員長の平林克敏副会長から、今回の成果のまとめとして、「この事業の関係者が一堂に会して、やり遂げたという充実感と感動を皆様と共有することができ、感慨無量である。この事業は、百周年の基本理念である〈全員参加〉〈後世に残る事業〉〈JACの伝統をいかに表現するか〉を登山と山岳文化の立場から実施したものであり、全会員の記憶とそれぞれの心の中で生き続けるものと思う」旨の挨拶があった。

フォーラム終了後、引き続き同所で祝賀懇親会が開催された。

(向野暢彦、森武昭)

「追記」踏査報告書を購入希望の方は事務局へFAXかハガキで申し込んでください。1200円十送料実費。10冊以上まとめて購入される場合には送料無料。

竹内洋岳「14サミッター」として始動！ 講演会と壮行会が開催される

今村千秋

■講演会「カンチエは厳しかった」

2月5日18時より、長期登山計画推進プロジェクト(橋本清代表)主催による講演会が開催された。講演者は本会の会員で、現在最も先鋭的な登山活動を行っている竹内洋岳氏である。会場の104号室は会員や大学山岳部員を含め、60名ほどの参加者で満員。しかも参加者の半数近くは希少な学生や青年部の若手であり、氏の登山活動への関心の高さがうかがえた。講演会は橋本副会長の「若い人は今入ると入会金が無料だ」と、半分本音交じりの入会勧誘をこめた挨拶で始まった。

竹内氏は自分で用意したパワーポイントを駆使し、ジェスチャーたっぷりと、ユーモアいっぱい、解説を交えて講演した。

「1991年に大学のクラブでシシヤパンマへ遠征したのがヒマラヤ登山の始まり。その後、1995年のJACマカールー東稜遠征

(チベット側からの初登頂・重廣恒夫隊長)が、ヒマラヤへ毎年のように行く発端となった。マカールーはこれまでで一番苦しい登山だった。あのマカールーに比べれば……と思えばがんばれる」と話し始めた。

「その後、エヴェレスト、JAC青年部のK2(山本篤隊長)などで登山を継続してきた。そんな登山の転換期は、2001年のナンガ・パルバット(国際公募隊)への参加だった」

この国際公募隊参加の経緯や、後に真のパートナーとなった、ラルフ・デュイモビッツ氏やガリンダ・カールセンブラウナー氏らとの出会い、それ以降のヒマラヤでの活動(2003年のカンチエンジュンガ、2004年のシシヤパンマ、アンナプルナ、GⅠ、GⅡの継続登山)などにも触れた。この時代の行動については会報「山」の713号で江本嘉伸氏が紹介し



学生や青年部の若者でうまった講演会。熱心に聞き入る参加者

ているので、参照していただくことにし、ここでは、2005年のシシヤパンマ南西壁以降の竹内氏の活動を紹介する。

「2005年は、8000メートルの継続登山ということで、ラルフとガリンダとの3名でシシヤパンマの南西壁とエヴェレストの北西壁を目指した。シシヤパンマではスピードを重視し、食料はベビーフードやパスタ、マッシュポテト、生ハムなど6日分(少々)、ガスボンベは多めに用意した。やばい時は落ちる前に下りる、ロープは極力使わない(前進するためのロープは積極的に使用するが、安全を

確保するためのロープは使用しない)」ということまでアタックした。悪天候が続く中、オーストリアの天気予報士(友人)に衛星電話で予報を聞きながら、2泊のビバークで登ったが、本当に厳しかった。テントや登攀具、食料、ゴミなどすべてを背負ったの行動は大変だった」

「それからエヴェレストの北側のベースキャンプに入り、スーパークローアールに登る予定だったが、完全な蒼氷のため断念し、新ルートから7100メートルのノース・コルに上がり、天候待ちをしながら3泊した。ノース・コルには、多くの登山者がいて、まるで涸沢のテント村のようだった。テントの近くには、各国の食料がいくらかでも落ちていた。拾って並べればフルコース、それくらい落ちている。

天候待ちの後、登頂を目指したが、7500メートルのC3予定地の直前で、突然、意識を失った。頭の激痛で意識を失い、頭の激痛で意識が戻る、その繰り返しが続いた。意識が朦朧とするなか、ラルフとガリンダにテントに収容された。一晩ほとんど意識が無かったような気がする。翌日、ラルフとガリ



「14サミッター」として始動する竹内氏

ンダになんとかザイルで確保されてノース・コルに下りた。あの状態からなぜ助かったのか、仲間がいてくれたからとしか言いようがない」

「2006年は、カンチェンジュンガとローツェの継続を考えていた。無酸素・アルパインスタイルで8500^{メートル}峰の壁を登るのは、同じ8000^{メートル}峰でも困難さが全く違う。厳しいものだ。しかし、世界の主流はその方向に動いている。カンチェンジュンガは03年の再チャレンジだった。登攀は13日間の行動で、厳しいギリギリの登山であった。継続して挑んだローツェは、頂上直下まで到達したが断念した」

その後、参加者から高所順応の考えについて質疑を受け「前年、獲得した高所順応は継続しないの

で、別の山で順応するか、その山の途中で負荷をかけて順応するか。自分はその山の高所に登った所で滞在し、身体に負荷をかけてから下りることで順応している」と答えた。

竹内氏の生死をかけた困難な挑戦と活動は「厳しい、やばい、ギリギリ」などのコメントとスライド写真から緊迫感とともに伝わってくる。反面、彼の軽妙な語りからは、同時に楽しんで登っている声や姿も浮かんでくる。なんと不思議な気がしたが、これが氏の個性であり、魅力なのだろう。

このプロジェクトの次回講演会は7月2日、加藤慶信氏を予定している。

■「14テンフォープロジェクト」いよいよ始動。壮行会開催される

竹内洋岳氏は8000^{メートル}峰14座に最も近い。そのクライマーが、自らのクライミングを問うと同時に、後に続く若きチャレンジャーたちの奮起を願いつつ、いよいよ「14サミッター」として始動した。これを成し遂げた者は世界で十数名。日本人としては初となる。

この「14テンフォープロジェクト」始動にともない、3月8日、東京・渋谷区で壮行会が行なわれた。氏のスポンサーとなる企業各社、プレス関係者、日本山岳会の田邊・橋本副会長らなど約60名が集まり、エールをおくった。

竹内氏は「あと3年、2010年までに残りの6座に登り、14テンフォープロジェクトを完結させたい」と決意をのべた。

さらに「過去にヒマラヤ登山を行なっていた頃の先輩に比べれば、登山道具の改良、情報機能の進歩により恵まれている。だからこそ、より困難な登り方やルートにチャレンジして残る6座に登りたい。無酸素、アルパインスタイル、バリエーション、継続、コンパクト、スピーディ、ロープや道具は極力使わずフェアに、自分らしいチャレンジがしたい。14」という数字に生命を与えることで、自分自身に、さらには後に続く後輩にもチャレンジ魂を持つてもらいたい。皆さんも「14」の数字をみたら、私の顔を思い出して欲しい。今、苦しんでいるだろうか、今、登頂の充実感に浸っているだろうか、と。そんな私を思い出しエールを

おくってもらうのが、一番うれしい。そのエールが私のエネルギーになります」と語った。

その力強い魅力ある語りに、会場からは大きな拍手がわいた。

3月25日にはマナスル、ガッシャブルムⅡ、ブロードピークの継続登攀を目指して日本を発つ。高所登山に関心あるものには、今後の行動報告が楽しみで目が離せない。「14サミッター」に挑む氏の顔を思い浮かべながら、大きなエールをおくり続けた。

青藏鉄道チベット走破9日間
 ~ゴルムドからラサ1,142km 走破 海拔5千kmを体験~
4/28 発 ¥398,000

航空機のように車内は与圧され、酸素吸入設備もある

Wec 株式会社ウェック・トレック
 国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
 〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
 電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

東西南北

「小島鳥水 版画」レクシヨン展 —山と文学、そして美術」紹介

飯田年穂

日本山岳会の生みの親で初代会長、小島鳥水旧蔵の版画を集めた企画展が、現在、横浜美術館で開かれている。東西の版画コレクションの展示を中心に、登山のパイオニア的活動も紹介することで「鳥水ワールド」の実体像に迫ろうとする企画になっている。

近藤信行氏ら編集の『小島鳥水全集』（大修館書店）からも、日本の近代化を代表する文化人鳥水の多才ぶりを知ることができるが、筆者は、近代化をめぐる日本と西欧との比較文化的な点から鳥水に関心を持つようになった。久々に開催される鳥水展ということであり注目していたが、その期待に応

える充実した展覧会だ。

幼い頃より文明開化の地横浜に生きた鳥水にとって西洋との出会いは早く、彼の人間形成に大きな影響を与えた。横浜商業学校での自立心を養う教育、横浜正金銀行就職など、西洋からの風を直に受けながら西洋と対等に向き合う精神と国際感覚が育まれている。

浮世絵との出会いは幼少時の友人がきっかけだが、のちウエストンの知己を得ると、その書齋に北斎が飾られているのを見て本格的な関心が芽生えたという。日本人の浮世絵に対する無理解と、欧米人によって貴重な作品が国外に流出している事実に驚愕した鳥水は、早速浮世絵の研究に取りかかる。日本における実証的浮世絵研究の先駆者となった鳥水は、浮世絵の芸術的価値を擁護・主張すると共に収集も手がけ、それは勤務で赴いた米国でさらに精力的なものと

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

なる。その間には西欧版画にも目覚めたことで、東西にわたる極めて質の高い版画コレクションが出来上がったといった。

しかし、そのコレクションは帰国時の通関トラブルによって消息不明となり、また浮世絵の多くが戦火到来を目前に売り立てにかけられ散逸していく運命にあった。現在ではその再現の努力が進み、今回の展覧会は、ご遺族の協力も得て、横浜美術館が収蔵する作品を初公開することになった。「これまで文献でのみ存在が知られていた幻の鳥水コレクション」を目の当たりにすることができる。

鳥水のこのようなコレクターとしての側面は、あまり馴染みなかったかもしれない。山岳会にとつての鳥水とは、近代的登山の開拓者というイメージが強い。鳥水自身は「山と浮世絵は、私の知識のためには、双生の胎児」と書いていて、両者が分かちがたい関係にあったことが伺われる。鳥水が東西交流の接点に身を置きつつ、版画の再評価を通して新たな芸術的創造に関わろうとした姿は、アルピニズムの実践により未知の山と自然を探検し、新たな山岳と風景

なる。その間には西欧版画にも目覚めたことで、東西にわたる極めて質の高い版画コレクションが出来上がったといった。



ギャラリー・トークで解説する近藤信行氏

美の形を発見していったことと重なり合っている。それはまた、浮世絵にせよ日本アルプスにせよ、日本人に先立って外国人により発見され、いったんは外国の手に渡ってしまった日本固有の価値の再認識であり、回復でもあった。

展覧会では、アルピニスト、文学者としての鳥水の面にも充分光が当てられていて、『日本アルプス』などの初版本や登山に関する資料も多数出展されている。

西欧に正面から立ち向かい、山と版画を実践の場として文化面から日本の近代化に参画しようとした探求者鳥水の強い想いと、そこに込めた気迫が、見ていてはつきりと伝わってくる。会期は4月4日までなので、ぜひ一度足を運んでいただきたい。

森づくり、日本山岳会の 将来、そして熱帯雨林

橋村一豊

日本山岳会では、青森支部が白神山地で、自然保護委員会が高尾の森で、岐阜支部が小津権現の森で、広島支部が中国山地の森で、宮崎支部が地元の森で、それぞれ特色を生かした森づくりをやっている。関西支部も森づくりを模索中である。わが東海支部でも、猿投の森で広葉樹二次林の環境林への誘導をやっている。

これらを包括的に言えば、いずれも森林環境とフローラ(植物相)の活性を向上させ、森の恵みや多種の公益的効果を人間にも野生動物にももたらせ、バイオダイバースイティ(生物多様性)を保全しようとする社会貢献の活動である。近づいてくる2020年の公益法人のスクリーニング(適格審査、ふり落し)では、それぞれの法人が行なう事業の社会貢献度が厳しく吟味される。公益事業の少ない日本山岳会にとって森づくりは、生き残りを託する柱の一つで

あるが、山岳会員一般の関心は高くない。「森づくりは登山ではない」と、旧来の山登り一辺倒の価値観にしがみつく姿も散見される。世界の見るべき未踏峰はなくなつた今日、アルピニズムはもはや緩やかな自然死に向かつている。この認識に欠ける人が意外に多い。腐蝕は芯から始まっている。

山岳会の伝統的(古くからある)価値観に固執した行事を繰り返していれば、これらは社会貢献とは無縁なものばかりで、公益・社団法人としての日本山岳会の存続はないだろう。会員平均年齢の高齢化、若者の山岳会離れ、登山離れは、伝統的価値観により山岳会を



4～5年ぶりの一再開花が始まったフタバガキ。カリフラワーのような樹冠が特徴で超高木は70mにもなる。一再開花はアジアの熱帯雨林にだけ起こり、その原理は解明されていない

運営していくことの行きづまり、不活性化、廃絶を暗示している。

公益法人のスクリーニングを山岳会の活性化のまたとない機会として捉え、古い事業や慣行を改廃して今日の魅力あるものと入れ替えていく取り組みを、会長や理事会は実行で示してほしいと思う。

さて、森づくりには生態学や林業技術が必要だが、もっと根源的には自然観の形成こそ必要だと思う。自然観の形成はあくまで実地優先、現場指向が大切である。自然の中に身を置いて実相観入する私たちは森づくりに着手する数年前から志を同じくする京都、関西、広島、岐阜などの支部や、東京の自然保護委員会と連帯して、自然度の高い森での学習を旨とする「森の勉強会」を毎年催行してきた、今年で十回目になる。この勉強会で自然観を形成していった人は多い。私自身もそうだ。

自分たちの森をやり始めて気づいたことは、それにばかりへばりついてはダメ、先が見えなくなる。山岳会の古い価値観にへばりついてると近視眼に陥るのと同じである。どこへ行っても似たような樹種構成でフローラ(植物

相)やフオーナ(動物相)が単純な日本の温帯林、ヒトの過剰介入によって樹種が貧弱なヨーロッパの温帯林のようなところは何回行っても堂々めぐりの感が拭えない。この閉塞感から抜け出すには森の最高の姿を見るべきだとの思いがしてきた。

通年の休みなき光合成、新種発生のゆりかご、生物多様性の極致、遺伝子の宝庫、巨大な突出木(エマージェント、70mを超す樹高)、一万年前から続いてきた地球最古の森、これが森の最高の姿、熱帯雨林である。

小島烏水

World of Kojima Usui Collection

版画コレクション

——山と文学、そして美術

北斎、広重、国芳、ピカソ、マティス、ゴッホ…
幻の名コレクションが、いま鮮やかに甦る

〔企画・監修〕横浜美術館 定価2,300円(税込)

大修館書店 直接注文 ☎03-3934-5131

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

山形支部
樹氷原を滑る会

山形支部恒例の「樹氷原を滑る会」が1月27・28日、蔵王温泉スキー場で開催され、会員14名が参加しました。暖冬の影響で心配されていた積雪も例年並みとなり、樹氷も見ごろとなりました。

28日、吹き荒れた吹雪も止み、快晴の朝を迎えました。無風快晴の絶好のコンディションに歓喜し、ロープウェイ山頂駅まで登り、白銀の大パノラマを満喫、樹氷原の滑降を楽しみました。

その後、われわれのパーティ3名は、ロープウェイ山頂駅から地蔵山(1736メートル)へ登り、山頂から人形や怪獣のような個性豊かな形をした樹氷(スノーモンスタール)の中を縦横無尽にシュプールを刻み、ザンゲ坂からの樹氷原コースに合流、そのままユートピア



蔵王名物の樹氷の中でスキーと温泉を満喫

ゲレンデから黒姫、大森ゲレンデまで10キロのロングダウンヒルを楽しみました。

当日から「2007蔵王樹氷まつり」も開催され、蔵王名物大露天風呂も無料開放。滑った後は開湯1900年の歴史のある効能豊かな温泉に浸かれ、まさに極楽気分です。また、幻想的な樹氷のライトアップなどのイベントも盛

岐阜支部

私たち県民の森づくり

岐阜支部では、2006年4月の新年度から岐阜県と共同で「私たち県民の森づくり」と称するボランティア活動を始めた。

2005年の当初、県との協議に入った頃には全く想像すら出来なかったが、「高尾の森づくり」や「猿投の森づくり」などの現場を訪ね、次第にまわりの意識も高揚し、具体化していった。

その後、県と何度か打ち合わせをした結果、06年5月に下呂市で行なわれた「第57回全国植樹祭」を記念して、奥美濃の県有地である小津権現(1149メートル)において、県との共同事業として立ち上げようではないかということになった。

550ヘクタという広大な面積の中で「山岳会ならではの森づくりを継続的に行ないたい」というわれわれの希望を県に理解していただき、山頂までの新たな登山道の整

りだくさんです。皆さん、ぜひ「樹氷と遊び」に蔵王へお越しください。
(阿部興二)



「私たち県民の森づくり」への参加者たち

備と、標高820メートル付近における森づくりを4月の残雪期から始めた。そして、12月の初雪までに21回のボランティア活動を行なった。他の山岳会や一般の人を含め、延べ200余名の参加があり、それなりの成果を収めることが出来たと思っている。

継続事業として「地球温暖化防止と野外学習の場の創設」を目標にし、今年も雪だけを待つて4月から12月までに約20回の活動を予定している。この「私たち県民の森づくり」が、多くの人の交流の場になれば幸いである。

(藤井法道)

平成18年度第2回通常総会

平成19年度事業計画・平成19年度収支予算を承認

社団法人に対する文部科学省の指導によって年2回となった18年度の第2回通常総会が3月10日、弘済会館で開催された。

総会は会員5634名のうち、出席者84名、委任3104名で成立。吉永総務担当理事が年2回開催となったことを説明、平山会長の挨拶に引き続き、議案の審議が行なわれた。

まず、公益事業、一般事業及び会員のための事業を盛り込んだ「平成19年度事業計画案」を全会一致で承認。次いで総額8431万4357円の「平成19年度収支予算案」も全会一致で承認され活発な質疑の後、通常総会は無事閉会となった。また2月26日にご逝去された山本健一郎監事の後任に、内田博氏が選任された。

平成18年度第2回通常総会で承認された「平成19年度の事業計画」および「平成19年度収支予算」の詳細は次号でお知らせいたします。

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

資料映像委員会

1970年エヴェレスト登山隊使用の時計「タグ・ホイヤー」寄贈の報告

1970年エヴェレスト隊(松方三郎総隊長)の隊員が使用した高所用防水時計タグ・ホイヤー(スイス製)が、関塚貞章会員のご好意で本会に寄贈され、2月1日、資料映像委員会でご受け入れた。

同時計は、遠藤光男会員が同登山隊に寄贈したもので、登攀中、



防水時計「タグ・ホイヤー」(スイス製)

医療委員会

講演会「登山のためのトレーニング」どのようにつけ、怪我、膝・腰痛を予防するか

2月20日、東京体育館において「登山のためのトレーニング」どのようにつけ、怪我、膝・腰痛を予防するか」が開催された。演者は鹿屋体育大学の山本正嘉氏で、氏は登山の運動生理学の第一人者であり、アコンカグア南壁やチョ・オユー登頂などをされた登山家でもある。

講演は体力不足や、膝・腰痛に悩む、主として中高年登山者の関心を引き、会場は135名の参加

者で満席だった。講演のテーマは4項目に分けられ、まず登山はウォーキングよりも心肺機能を鍛える効果が強く、健康に良いことが指摘された。

次に、脚力の衰えた中高年の下山時に転倒事故が多いことと、それを防ぐ重要性を強調された。トレーニングはそのための役に立っているのかという検証の結果は衝撃的だったようだ。というのは、ウォーキングや階段登りはほとんど役に立たず、筋力トレーニング、ジョギング、坂道ウォーキングが効果的とされたからである。スクワットは大腿四頭筋を鍛え、「最初は10回×3セット、馴れたら15回×5セットを週に3回程度」行なうようにと、実演をしながら説明した。

3つ目のテーマは、体の故障、



スクワットの模範演技を行なう山本氏

広報委員会

第2回広報連絡会

特に膝関節痛と腰痛を防ぎ、治すにはどうしたら良いかについてだった。故障やトラブルは、体力不相応の山に無理して行くことによつて起るので、山のランクを落とすか、痛みを避ける工夫をするか、どちらかが必要である。工夫として、膝関節痛には筋力トレーニング(スクワット)、ストレッチング、サプリメント(グルコサミン、コンドロイチン)、下肢サポートタイツ、靴のインソールを挙げ、腰痛には腹筋運動、ストレッチング、腰サポーターを挙げた。山本氏自身、数年前までは登山時にストックを用いていたが、最近は使わないで済んでいるとのこと、説得力があった。

最後にトレーニングが三日坊主にならないための工夫として、目的を明確にし、目的に沿ってトレーニングを修正することや、自分の弱点を把握してフィードバックする自己管理の必要性について述べた。

講演終了後、活発に質疑応答がされた。わかりやすく、実践的な内容で、大変有意義な講演だった。

(野口いづみ)

さる1月26日、広報委員会主催の第2回広報連絡会が、日本山岳会104会議室で開催された。広報委員会は、06年9月、高齢化が著しい日本の登山界の現状や問題点、情報などをメディアの山岳担当記者たちと共有し、情報交換することを目的に発足した委員会である。

当日も、在京の新聞社、通信社、テレビ局の記者12人ほどが集まった。まず田邊副会長から開会の挨拶があり、続いて平山善吉会長による最近の日本山岳会の活動報告が行なわれた。山岳会有志による登頂50周年を記念したマナスル登山隊の様子や青年部によるパンバリー・ヒマール登頂の概要などの説明があった。

続いて帰国したばかりの東海支部冬期ローツェ南壁登山隊の田辺治隊長による登山報告が行なわれた。ルートの説明や困難だった登山の概要が、30枚ほどのスライドを使いながら説明された。3度目の挑戦で初めて冬期ローツェ南壁に登り切った様子がわかりやすく

報告された。なお南壁は登り切ったものの、ローツェの山頂へは直線距離にして200メートルほどあり、さすがに余力は残されておらず、登頂は諦めざるを得なかったという。帰国早々の報告で、スライドによる映像も目新しく、記者からも南壁の様子についていくつかの質問があり、興味深い報告会となった。

その後、集会室に場所を移して、簡単な軽食と飲み物による懇親会が開かれた。ここでも田辺氏に質問が集中し、困難を極めた登山の様子が話された。今後もうした登山隊の報告などとともに、情報交換を行なうことを確認して、第2回広報連絡会が終わった。

(神長幹雄)



登山の様子を話す田辺氏

山研運営委員会

山研で新年を迎える

一昨年の7月に開通した新釜トンネルを抜けると、そこは白銀の世界。梓川右岸の治山道は、焼岳を間近に眺め、霞沢岳、六白山を写真に収めるのに最高のコースである。正面の穂高の峰々がオレンジ色に染まるころに山研に到着。ちようど水汲みから戻ってこられた横浜のSさんと2年ぶりの再会をよるこぶ。

薪ストーブの火は快適な空間をつくり、人を集め和ませる不思議な力を持っている。初めて会った会員と話はずみ、坂本シェフの心づくしの料理と年越しそばで新しい年を迎えた。

元旦はおせち料理と、昨日に続く快晴。明神の穂高神社奥宮に詣でて今年の平安を祈り、徳本峠をめざす。峠うえの展望台から穂高連峰のダイナミックな眺望を独り占めで堪能した。

その夜は、北海道から見えたYさんが提供してくださった七面鳥が、日山研委員長差し入れのワインとともにふるまわれ、正月とクリスマスを一度に迎えたような豪

華な晩餐を楽しんだ。

わずか2泊の短い滞在であったが、非日常に身をおくことによつて、新しい気分で新年をスタートする良い機会となった。坂本委員をはじめ、今回の開所・閉所のためにわざわざ入山された山研委員の方々、そして素晴らしい出合いを共有できた同宿者の皆さんに、心から感謝申し上げる。

山研は、国立公園の厳しい規制のなかで特別に建設が許された、日本山岳会の貴重な財産である。

会報『山』の1月号に、新年度からの利用料金の値下げ・改定の記事が掲載されているが、この貴重な施設がより多くの会員に利用される事を願つての処置であらう。一会員として、これからおおいに利用させていただきたい。

(金中和)

緑爽会

鼎談「山の人生・山の文化
今西錦司・深田久弥・山崎
安治三氏のことなど」

2月3日14時から山岳会会議室で標記の集會が開催された。日本の山岳界に大きな足跡を遺した三



3人の思い出を語る山本・近藤・平井氏(左より)

氏について語るのは、生前親しく薫陶を受けた近藤信行、山本良三、平井吉夫の3会員。

まず、今西錦司氏が会長時代に理事を務めた近藤会員は、理事會が終わると神保町のバー「カントリー」で飲み、深夜、学士會館まで送つた思い出や、その時間聞いた話を披露した。若い頃の今西さんは上京の折々に木暮理太郎を訪ねて教えを乞うた。むろん、中央アジア研究者としての先輩の胸を借りたのである。慶応の大島亮吉とは文通をとおして互いに意気投合しながら、おそらく2人が会う機会はなかったのではないかと推測する。

また、戦後、文壇から遠のいていた深田さんが『山』で復活して『日本百名山』『ヒマラヤの高峰』出版の偉業を果たすまでの後半生を、当時編集者でもあった立場から語った。

山本会員は、学者として生態学、霊長類学、人類学、遺伝学とスケールが大きかった今西さんには、大学の講座のワクがなく無給講師時代が続き、教授になった時は54歳だったことを語り、これほどの人物はもう出ないだろうと言いつつた。さらに登山家・探検家としても天性のリーダーだったことや、

それを支える京都の仲間たちの結びつきを紹介した。

現在、図書委員長を務める平井会員は、山崎安治氏から受けた何よりの薫陶は酒を飲むことで、飲みながらの蘊蓄を聞くだけでも山岳会に入った甲斐があったと懐かしんだ。

鼎談の後、酒好きの先輩方のために遺影に向かって献杯した。会場には往時を知る人も新入会の人にも集まって、日本山岳会の歴史のひとつこまを興味深く聞き入っていた。参加者48名。盛会だった。

(近藤緑)

山と氷河の図譜

——五百澤智也山岳図集——

五百澤智也 著/B5判/144頁/2,940円

(カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品掲載)

ヒマラヤと日本の山や氷河の細密鳥瞰図・展望図、地形図、そしてアルプスの山と氷河の水彩スケッチ、さらに日本の氷河地形分布図と日本列島地貌図など192点。全作品に解説付。

五百澤智也の山岳鳥瞰図『山の科学画』展

千葉県立中央博物館 2007年3月3日(土)~5月27日(日) 9:00~16:30

地図出版の四百年

——京都・日本・世界——

B5判/168頁/口絵・図版多数/2,940円

京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館 編

日本で初めて地図が出版されてから四世紀。先人たちの創意工夫と地図の進化を、京都図・日本図・世界図を中心にたどる。博物館展示ではとりあげられなかった地図も多数収録。

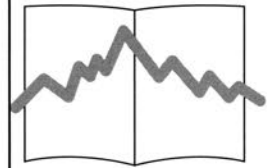
京都大学総合博物館企画展「地図出版の四百年 京都・日本・世界」

2007年4月4日(水)~5月6日(日) 9:30~16:30 月・火休館

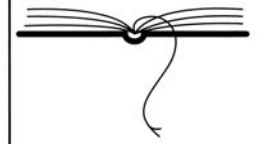
〒606-8161京都市左京区一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111 FAX.075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ (表示価格は税込)



図書紹介



ブルース・トレンパー・著／
特定非営利活動法人日本雪崩
ネットワーク・訳

『雪崩リスクマネジメント』



2004年12月
山と溪谷社刊
A5判 278頁
定価 1800円

まず特筆すべきは、本書はNP
O法人日本雪崩ネットワークの翻
訳した力作であること。読者に語
りかける意気込みを感じさせる。

構成はごく当たり前に、雪崩の
基礎、雪崩の仕組み、地形、気象、
積雪……と進むのであるが、この
あたりに新奇性はなく、むしろ散
漫な感じすら抱く。雪崩の怖さは
動画を見せるのが一番有効だ。

雪崩の解説書については鮮明な
雪の結晶の写真がたくさん載って
いて詳しいものが昔から刊行され

ている。

しかし、このあたりは本書の中
では露払いの部分で、その先に読
みどころは待ち構えている。話が
現場で何を感じ、見て、為すべき
かという分野に入ると、俄然冴え
てくる。読者も引き込まれること
だろう。

著者も訳者も、現場で何が出来
て何が出来ないのか、何をしなけ
ればならなくて、何をすべきとい
かないのか、そういうことをいかに
して伝えるかに苦心している様子
が窺える。

著者が言うように、「ヒューマン
ファクターと呼ばれるものに丸々
一章を割」いて解説している。同
様に訳者もあとがきで述べている
「ヒューマンファクターを正面か
ら取り上げていること」で他の雪
崩啓蒙書と一線を画していると言
っていいだろう。

著者自身の告白も含め、雪山を

フィールドにする者はほとんど例
外なく雪崩に関する自分の知識を
過大評価している。長年雪山に登
っているだけで雪崩に関する知識
も身についてくるような錯覚があ
る。

本書が、そんな過大評価や錯覚
を自覚する契機となり、現場で実
地にどんな演習をすることが必要
なのかを知り、そして実践して行
くトリガーとなってもらいたい。

日本雪崩ネットワークは、毎年
何度も聴講生を公募して雪崩講習
会を開いていることにも言及して
おこう。

(中山茂樹)

内田嘉弘・著

『シルクロードの風——山と遺 跡とオアシス——』



2007年1月出版刊
ナカ5判 269頁
定価 2520円

269ページの分厚い本である。
中国太白山に始まる旅行記は、私
にとってはもともと興味ある地域
であり、どのページを開けても何
か懐かしい地名、人名などの語彙

がある。

目次は西安から西への順で、太
白山登山に始まり、河西回廊、タ
クラマカン砂漠一周、青海の道、
カイラス、そして、プリアン・サ
ール、コムニズム(7495m)、
イラン、西モンゴルへと展開し終
わる。その間、実に博学多才さを
読ませてくれた。

内田さんの山は「あとがき」に
あるように、1975年(当時38
歳)のプリアン・サールに始まる。
その報告書『PRIAN・SAR
R』には、天使のいるオトギの国
という副題がついている。プリア
ンは現地語でオトギの国であると
いう。

そういえば、ムスタグ・アタ
にもその山頂には桃源郷があつて
白いラクダが棲み、食べた草がど
んどん伸びていくという話を現地
で聞いたことがある。著者は山
のスケッチも得意であり、カラク
リ湖からの孤高ムスタグ・アタ
の風景もスケッチブックに収めた
ようだ。カイラス巡礼のくだりで
はカイラスを最初に見た時、描こ
うとする手が震えたという。

著者は最近、若山牧水のことを
調べたりしているが、今回の旅行

記ではいろいろなことをよく調べているから感心する。「シルクロード学」をしっかり学習していたことも、本書の終わりにあかしている。

1977年のコムニズム峰7495メートル登頂は40歳で、その頃では40歳以上で7000メートルより高い山に登頂したものは日本人では少なかったことを表に示している。著者自身、登頂の新鮮さと感動はプリアン・サールで終わっていたようである。

終章の1992年のモンゴル紀行はソビエト連邦解体の影響下のモンゴルで、混乱の世相が感じられたことを述べている。

著者は「ドイツ歌曲、山の王者」が好きであると述べているが、その「道はいかに遙けきも 我に何かあらん……」といった詩に共感があつたようだ。

著者の旅がどのように進行し、展開していくのか、これからの内田旅学が楽しみである。

(塚本珪二)

『句集・目細』

小林碧郎・著

目細

2007年1月
安楽城出版刊
四六判 205頁
定価 2700円

山で俳句を、と思われたことのある方には、ぜひお奨めしたい句集である。

雪嶺の天に牆なす牧びらきの巻頭句から

雲表の磐座におく露燦々の結び句までの513句が読者に思い当たる数々の山行、情景、記憶を思い起こさせる。

会報『山』にも折にふれ俳句を寄せられている著者は、俳誌『馬酔木』の同人、特に山岳俳句では屈指の作者として知られている。

明治大学ワンダーフォーゲル部OBでもあり、かつてあの水原秋櫻子氏を山々の吟行に案内され、数多くの名句を生み出された貴重な経験の持ち主でもあると伺っている。

山行と俳句を結びつけられた著者は、1987年、30年にわたつての作句より第一句集『雷鳥』を

発刊され、『目細』はその後20年間の集大成と聞いている。

随所に詠みこまれている可愛い目細を代表とする山の小鳥たち、小動物などを巧みに取り入れて、句中に四次元的な描写の広がりを感じ取れる。

孔雀蝶わがやすらぎの息あはす上高地での一句である。ちょうど山研開所の頃から見ることで、小柄ではあるがエキセントリックで派手な紋様のタテハ蝶である。陽光を浴びての翅の開閉はわれわれの複式呼吸を思わせる。下五の息あはすが何とも言えぬ山男の孤独、やさしさ、自然との調和を表現して妙である。

自然との一期一会、作句のはしはしに実際に山に行つた者でしか味わえない「山への讃歌」の溢れる句集である。

(勝田房治)



浅春 奥野溪石

図書受入報告 (2007年2月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
三宅暁(編)	くらいま 特別号——慶應義塾中等部山岳部50周年記念	127pp/26cm	慶應義塾中等部山岳部OB会	1997	瀬戸英隆氏寄贈
JAC中央分水嶺踏査委員会(編)	日本列島中央分水嶺踏査報告書	185pp/30cm	JAC中央分水嶺踏査委員会	2007	当会発行
石岡繁雄・相田武男	石岡繁雄が語る氷壁・ナイロンザイル事件の真相	446pp/20cm	あるむ	2007	著者寄贈
五百澤智也	山と氷河の図譜——五百澤智也山岳図集	142pp/26cm	ナカニシヤ出版	2007	出版社寄贈
木原浩(写真)、大場秀章・他(解説)	新日本の桜	263pp/27cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
丹羽彰一	残照の山々	238pp/19cm	白山書房	2007	出版社寄贈
武藤昭	登って写して酔いしれて——山岳映像カメラマンの50年	211pp/20cm	白山書房	2007	出版社寄贈
南極OB会・他(編)	南極観測隊——南極に情熱を燃やした若者たちの記録	523pp/19cm	日本極地研究振興会	2006	鳥居鉄也氏寄贈
平山善吉・佐野雅史・他(編)	写真集——南極	167pp/22x31cm	日本極地研究振興会	2006	鳥居鉄也氏寄贈



2月理事会

日時 19年2月21日 18時30分

20時15分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田・石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・渡邊・石橋・古野各理事、竹中監事、今村常任評議員

【委任】山本監事、小倉・重廣各常任評議員

●開会に先立ち平山会長より、年度末も近づき、決めるべきものはしっかりと決めてほしい。又、継続審議すべきものはその経過を付して引き続き事項として次の執行部に申し送りたい旨発言があった。

【審議事項】

1 役員選任手順及び日程について

役員、評議員が今期末をもって任期満了となるため、平成19・20

報告

年度の役員、評議員の選任手順及び日程について定款第14条・第15条、細則第7条・第8条、及び平成14年3月理事会確認の「候補者推薦の手続」を確認し、来る4月21日開催予定の評議員会を最終期限として選任手続に入ることとした。

(承認)

2 海外登山基金助成選考結果について

平成18年度海外登山基金の助成先を次の4隊に決定した。

(1) 2007パキスタン・クライミング・チーム(シスパール 他) 15万円

(2) 日本山岳会広島支部隊(中国・バーワンシャン峰) 10万円

(3) 日本山岳会石川支部(インド・マリ峰) 10万円

(4) グビツァンポ源流学術登山隊(チベット・グビカンリ峰) 50万円

●なお、今後は登山隊の評価基準について検討を重ね、継続した評

価基準の作成を目指すこととした。

(承認)

3 平成19年度事業計画(案)について

2月17・18日の支部長・支部事務局担当者会議、及び2月20日の予算委員会における検討を基とした平成19年度事業計画(案)について総務担当理事が説明、3月10日開催の平成18年度第2回通常総会の議案とすることとした。

(承認)

4 平成19年度収支予算(案)について

収入総額11834343万9357円、支出総額117662万円とする平成19年度収支予算(案)について、その詳細を財務担当理事が説明、3月10日開催の平成18年度第2回通常総会の議案とすることとした。

(承認)

5 写真掲載許可願：(樺帝国データバンク

城数馬氏肖像写真(帝国データバンク資料館常設展示用)

(承認・有料)

6 名義後援願：東京都写真美術館

「大地への想い 水越武写真展」(承認)

7 平成19年度年次晩餐会について

会場の早期予約の必要があるため、平成19年度年次晩餐会を12月1日(土)、東京・高輪プリンスホテルで開催することとした。

(承認)

8 本会会員による海外トレッキング等への違法勧誘行為に対する注意喚起について

最近、本会会員であることを標榜してインターネット等を通じて海外トレッキング・登山に勧誘し、法令に違反する旅行業者的業務を行なっている会員が存在するとの指摘があり、本会に苦情が寄せられた事案があるため、会報で注意喚起することとし、その文言について次回理事会までに検討することとした。

(継続)

9 首都圏等の支部化に伴う支部助成金について

栃木県、茨城県、千葉県において支部設立の気運が高まっているため、支部助成金の扱いについて検討した。

本会ルームより遠隔な北関東3県の支部化に対しては細則第11条規定の額を助成することとするが、

首都圏については本会ルームの利用・各種行事への参加等のサービス享受の可能性及び本部財務状況への影響等を勘案することとして検討を継続することとした。

(継続)

【報告事項】

1 広報委員会の状況について
(田邊)

去る1月26日、8社12名のメディアの方々に本会の活動状況を説明した。

2 九州5支部懇談会の状況について(平林)

去る2月3・4日、北九州支部主管で開催、平林副会長が出席し、平尾台の記念登山を行なった。

3 土曜懇話会の状況について(田邊)

去る2月3日の土曜懇話会では、中村保会員に「最後の辺境、東チベットの未踏の山と氷河」を講演して戴いた。参加者約45名。

4 長期登山計画プロジェクト関連講演会の状況について(藤井)

去る2月5日、竹内洋岳会員を講師としてヒマラヤ登山塾第1回講演会を行なった。8000メートル峰14座の登頂を目指す登山の様子を

語って戴いた。参加者53名。

5 「中央分水嶺踏査フォーラム」開催について(石田)

去る2月17日、弘済会館において開催、創立100周年記念事業の一環としての中央分水嶺踏査事業の締めくくりとして「フォーラム」を実施した。各支部の担当者等参加者約120名。

6 支部長・支部事務局担当者会議の開催について(吉永)

去る2月17日・18日、弘済会館及び本会ルームにおいて開催、主として平成19年度の各支部の事業計画についての報告及び支部事務局担当者と総務委員会の連携の緊密化についての検討が行なわれた。

7 予算委員会の開催について(吉永)

去る2月20日、予算委員会が開催され、各委員会の委員長より平成19年度の事業計画及びこれに伴う予算について説明があった。

8 医療委員会講演会について(野口)

去る2月20日、講演会「登山のためのトレーニング 山本正嘉氏」が開催され、約140名の参加(うち会員約60名)があった。なお、昨年9月3日開催の実技講

習会「山での救急蘇生法」がDVD化された。

9 首都圏支部化の現状について(平林)

去る1月14日、栃木県内会員による支部化の発起人会が設立され、茨城県においても発起人会設立に向けての懇談会が実施された。また、千葉県においても設立の気運があり、有志による検討が続いている。

10 「百年史」の発行について(平山)

原稿が印刷に回っており、3月末には完成する見込み。

11 カバディア名誉会員の講演会計画について(吉永)

長期登山計画の検討に合せて、新名誉会員となられたカバディア氏のインド・ヒマラヤに関する講演会を実施すべく同氏と調整中。

4月上旬、東京、名古屋、関西地区での開催を計画している。

12 「高尾の森づくり」活動報告(篠崎)

去る2月6・7日、関東森林管理の業務研究発表会が行なわれ、本会「高尾の森づくりの会」の活動が「(社)日本林業技術協会理事長賞」に輝いた。また、昨年11月27

日、セネガル共和国環境保護者マタール・シセ水・森林局長及びオマール・ディアウ森林計画調整官が「高尾の森づくり活動」を視察され、参加型地方ボランティア活動を視察することができ有益であったとのコメントを寄せられた。

13 1月度新入会員 1名

新入会員の詳細な紹介は次号に掲載。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスベディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代田区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



ルーム日誌

2月

- 1日 青年部
2日 自然保護委員会
3日 土曜懇話会 緑爽会
5日 総務委員会 長期登山計画委員会
6日 図書委員会 スケッチクラブ
7日 事業委員会 山岳地理クラブ 101の会
8日 資料委員会 山の自然学研究会
13日 総務委員会 中央分水嶺委員会 アルパインスケッチクラブ 01会
14日 指導委員会 山想倶楽部 休山会
15日 科学委員会 アルパインスキークラブ
16日 総務委員会 フォトビデオ
- 『山岳』第百一年(二〇〇六年)掲載記事の訂正
A13頁掲載「山岳図書・絵画展」記事の本文中に「大森久雄氏」とあるのは「大橋晋氏」の誤りでした。両氏および関係者にお詫びして訂正します。
- 『山岳』編集委員会

- 19日 クラブ
資料映像委員会 図書委員会
20日 山研委員会 インターネット委員会 ゆきわり会
21日 理事会 三水会 つくも会
22日 自然保護委員会 山遊会
23日 アルパインスキークラブ
24日 アルパインスキークラブ 評議員会
27日 プモリ研究会 九五会
28日 高尾の森実行委員会 麗山会
2月来室者714名
- 会員異動(2月)
物故
鎌守篤磨(5605) 06・5・26
佐藤正八(11315) 07・2・6
岡本如矢(4716) 07・2・13
斉藤哲郎(6184) 07・2・13
山本健一郎(4836) 07・2・26
退会
岡本 敏(6683) 関西
三井高治(7008)
島尾久子(7278)
矢口陽一(7485)
鈴木 章(7742)
津田 誠(7857)

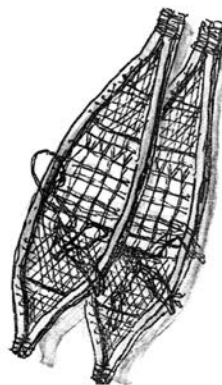
平成19年度事業委員会行事予定表

5月25日~27日	佐渡の山	佐渡島・金北山縦走
8月4日~7日	夏山登山	北信の山(高妻山・黒姫・飯綱)
10月12日~14日	紅葉山行	開催地未定
11月3日~5日	秋の熊野古道	熊野古道(小辺路)
12月2日	晩餐記念山行	大山(丹沢)
1月10日~16日	海外登山 オーストラリア	ゴジスコ登山オーストラリア(豪州最高峰)
1月12日~14日	スキー懇親会	開催地未定

色々な計画を用意しました。皆様のご参加を期待しています。

- 大塩條児(5878) 関西
三井 尚(9583) 静岡
水口武彬(9891) 富山
水村通子(10045)
會田宣明(11622)
常陸民生(11629)
福田泰文(11786) 富山
大田原謙司(11905) 福島
豊嶋匡明(12090)
伊藤久仁子(13206) 東海
西村和世(13292) 東海
高柳博行(13327) 東海

- 大幸 甚(13560) 石川
勝山 悟(13750)
日向 進(13907)
改姓
中村和貞(12801) ↓小和田
和貞



ゴールデンウィークに、
ヒマラヤ越えフライトで行く。

●アンナブルナ・ダウラギリ・
パノラマトレッキング10日間
4/27(金)発 ¥392,000

●エベレスト展望トレッキングと
シェルパの星10日間
4/27(金)発 ¥392,000



本社は業務拡充のため移転いたしました。

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 邦コンパニオン
アルパイン ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第16回山を語る 図書委員会

「すべては山から始まった」

―穂高から熱帯雨林へ―

国内外の高峰に始まり、壮大な自然の営みを地球規模で撮り続けて40余年、どんなことを考えながら撮影と発表活動をしてきたかをスライド映写をまじえて、語っていただきます。

日時 5月15日(火)19時より

場所 山岳会集會室

講師 水越 武氏

問合せ 松澤節夫 TEL 042-623-1566

*5月12日(7月1日、東京都写真美術館で水越武写真展「大地への想い」が開催されます。

◆「佐渡金北山縦走」事業委員会

ドンデン高原から金北山まで縦走し平根崎温泉に宿泊。景勝地大野亀周辺を歩きます。

①A班 5月25日(金)〜27日(日)

集合 25日9時15分 JR新潟駅

解散 27日15時 両津港

費用 4万円(宿泊、弁当、保険、現地交通・通信費他)

②B班 5月25日(金)〜26日(土)

集合 25日9時15分 JR新潟駅

解散 26日16時 金北山白雲台

費用 2万2000円

宿泊 25日ドンデン山荘、26日

IIホテルひらね

定員 15名

申込 4月20日迄に植木淑美宛

TEL 042-734-1498

FAX 042-734-1498

4月中旬、詳細を送ります

〒yoshimi-210@rose.odn.ne.jp

◆第27回日本登山医学シンポジウム開催のご案内

会期 6月2日(土)〜3日(日)

会場 宮城蔵王ロイヤルホテル

(宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉)

会長 内藤広郎(みやぎ県南中核病院)

内容 シンポジウム(中高年の継

続的登山習慣の意義「登山と栄養を再び考える」、特別講演、教育講演、一般演題など

続的登山習慣の意義「登山と栄養を再び考える」、特別講演、教育講演、一般演題など

演題募集 3月31日まで

詳細は左記HPを参照ください

(http://www.southmiyagi-mc.jp/27jsnm/)

中村光吉 個展のご案内

三ツ峠山荘主人ならではの表現

富士山の絵や写真が中心です。

会期 5月13日(日)〜19日(土)

(11時〜19時、19日は17時まで)

場所 銀座東和ギャラリー TEL 03-35542866

問合せ TEL 055517617473

◆西大台入山規制9月に延期

会報「山」06年9月(736)

号の「東西南北」欄に「来春、西大台入山規制へ」と題して報告を書いた。西大台利用適正化計画は同年12月に官報に告示され、環境省が準備作業を進めたが、指定認定機関の指定など行政手続きが遅延し、一地方地元に対する周知徹底に時間を要し、07年2月21日に至り、「運用開始を2007年9月1日に延期する」と表明した。

この計画は本年3月にパブリック

コメントにかけられて広く国民の意見を聴取し、4月下旬に確定して公表される予定である。9月1日から運用開始になれば、予約は3カ月前の6月1日から受けつけられる。

(田村義彦)

訂正とお詫び

2月(741)号、17頁2段20行「北山の会(洛北高校・大木高校のOB会)」は「北山の会(京都一中・鴨沂高校・洛北高校山岳部OBの会)」の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●今月は巻頭で、支部の活性化につながった中央分水嶺踏査の報告と、今後の海外登山を示唆する竹内氏の活動を取り上げました。今後の日本山岳会を象徴する、最近の動きだと思えます。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 742号

2007年(平成19年)3月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社